

志と英語力が重要

セミナーでは、まず、愛知医科大学卒業後、米国MAYO病院及び近畿大学助教授を経て、現在、鈴木病院で医師として活躍する木原幹洋氏が「医学教育の国際化と海外で医学を学ぶこと」と題して講演。英語で医学を学ぶことの重要性について言及した上で、「海外で先端医療を学ぶことで、日本の医療レベルの向上につながる」と指摘した。講演内容は次の通り。



木原幹洋 医師 (鈴木病院)

日本の医療向上にも貢献

なぜ海外医学部留学なのか、そして、なぜ海外で教育を受けた人が日本に必要なのかについて話をした。

私の希望は、海外で教育を受けた人が日本に戻ったというものだ。海外で教育を受けた者が、先端の医療知識を持ち帰ることで、グローバル化が進む日本の

医療の向上につながるものと、固く信じている。

日本の医学界の問題点を列挙すると、①英語教育に通じる医師が皆無②医師不足③真の意味で国際貢献ができる医師不足があげられる。

背景には、英語教育で育った医師が少ない点がある。日本の大学では日本語が中心で、その結果、メデイカル・イングリッシュに精通することなく、海外との交流も限られてしまっている。

医療のグローバル化が進む中で、先端医療の情報は常にメデイカル・イングリッシュで発信されており、このため、英語に精通していないと、世界の動きとの間でタイムラグが生じてしまう。

このためにも、英語教育に重点を置き、世界の医師たちとコミュニケーションを図り、英語のできる医師を育成していくことが、医療

界に求められている。日本の医師不足については、厚生労働省で、家庭に入った女性医師を現場に戻すなどの様々な施策を展開しているが、どこまで効果が見られるかは疑問だ。

また、医師の増員を図る動きがあるが、医師の数の問題ではなく、医師の偏在の問題がある。

一方、国家試験を通さずに、4年間海外の医師が日本の医療に従事できるという特例を使い、海外の医師を招き入れるという動きもあるが、国際社会で通用する日本人医師の育成が喫緊の課題だ。

つまり、海外でいろいろな教育を受けてくれば、日本の医療の国際化、ひいては日本の医療レベルの向上につながる。

その点でHMCU(ハンガリー医科大学事務局)の取り組みを評価したい。筆記試験に重点を置いたのが国とは異なり、一定の学力を

ハンガリー国立大学医学部の日本人留学生に話を聞く機会があったが、彼らは「日本の受験で合格を逃して医師の道をあきらめかけたが、再チャレンジの機会を得て、いま、毎日が充実している」と声をそろえて答えた。

海外の医学部進学セミナー

ハンガリーの国立3大学の医学部は2年前から、日本人留学生の受け入れを始めている。授業料などは日本の私大に比べて格安で、志はありながら、経済面や受験の力に阻まれ、医師への道をあきらめざるを得ないような日本人高校生らが、海外の医学部に進学しやすくなり、日本と世界に貢献できる、より広い道が開けてきた。こうした中で、医学教育の国際化と海外の医学部進学動向を探る「海外の医学部進学セミナー」(主催、教育新聞社主催、ハンガリー医科大学事務局共催)が6月14日、東京・新宿区の日本出版クラブ会館で開かれた。関東近県から高校長、進路指導担当教諭らが参加した。

ハンガリーで医師に

日本人留学生受け入れて道広がる

本日の医療分野の国際化にも寄与する。EUには現在、27カ国が加盟している。EUの憲法も出来つつある。医師をはじめ、歯科、建築士などの免許は、EU内のどの国でも通用するようになってきている。

特に、ハンガリーでは医学教育に力を入れ、世界中から留学生を募り、国際社会で通用する医師を数多く輩出している。

ハンガリーの国立大学医学部の入試制度について説明すると、本コースへの入学は、生

物、化学、物理とも筆記試験も口頭試験も英語で行うため、どうしても英語力があることが必須となる。

一方、予備コースは、本コースに入れない学生のために1年間の準備コースとして設けられているもので、準備コースを経ると、



参加者の声

▽ハンガリー医科大学に進学を希望する生徒がいたため、セミナーに参加した。

▽日本の医学部入学は狭き門のため、どうしても医者になりたい生徒に新しい道を開きたい。

▽海外の医学部の現状に関する情報が参考になった。

▽海外で日本人医学生を受け入れが増えることを期待したい。

大方、本コースへ上がっていく。予備コースに入るには、1点を争うような筆記試験はない。書類と英語力を審査し、面接を行って「医師としての意欲」といった観点から人物重視の審査を行い、入学を決定している。

英語で教育を受け、英語で活躍できる医師は、これから非常に重要な人材となる。EUに限らず、アメリカなど英語圏での医師免許の取得の可能性が広がり、国際舞台での活躍も期待できる。

一方、日本に帰ってきた場合について説明すると、

まず、日本の医師法では、海外で医師免許を取得した場合、厚生労働省の審査を受けることになっている。これは、ハーバード大学が、オックスフォード大学が、どこかの大学を出たとしても、厚生労働省が審査することとなっている。

審査の結果、予備試験からこの大学へ入学する場合は、4年間海外の医師が日本の医療に従事できるという特例を使い、海外の医師を招き入れるという動きもあるが、国際社会で通用する日本人医師の育成が喫緊の課題だ。

つまり、海外でいろいろな教育を受けてくれば、日本の医療の国際化、ひいては日本の医療レベルの向上につながる。

その点でHMCU(ハンガリー医科大学事務局)の取り組みを評価したい。筆記試験に重点を置いたのが国とは異なり、一定の学力を

ハンガリー国立大学医学部の日本人留学生に話を聞く機会があったが、彼らは「日本の受験で合格を逃して医師の道をあきらめかけたが、再チャレンジの機会を得て、いま、毎日が充実している」と声をそろえて答えた。

ハンガリー国立3大学の医学部は2年前から、日本人留学生の受け入れを始めている。授業料などは日本の私大に比べて格安で、志はありながら、経済面や受験の力に阻まれ、医師への道をあきらめざるを得ないような日本人高校生らが、海外の医学部に進学しやすくなり、日本と世界に貢献できる、より広い道が開けてきた。こうした中で、医学教育の国際化と海外の医学部進学動向を探る「海外の医学部進学セミナー」(主催、教育新聞社主催、ハンガリー医科大学事務局共催)が6月14日、東京・新宿区の日本出版クラブ会館で開かれた。関東近県から高校長、進路指導担当教諭らが参加した。

次に、ハンガリーの国立3大学(センメルペイス大学、セゲド大学、ペーチ大学)の医学部と共同で、日本人学生のための医学部進学プログラムを運営しているハンガリー医科大学事務局の石倉秀哉代表が「海外の医学部進学の実情とその傾向」と題して講演。国内外の医学部費用の比較を行った上で、ハンガリーの様子を紹介した。

木原医師が「英語が話せる医師が増えると、日本の医療界も変わる」と話していたが、海外で医師になる道を選択することは、メデイカル・イングリッシュを習得することを意味し、国際分野で通用する人材育成につながる。同時に、日



石倉秀哉

ハンガリー医科大学事務局代表

国際舞台で活躍も

日本の私大に比べて格安

入学金と授業料の初年度費用は予備コースが約140万円、医学部が約180万円、6年間合わせても約700万円と、日本の私大に比べて格安だ。

さらに、日本の国家試験へのバックアップも、今後、行っていく予定で、国際社会とともに、日本の医療界の発展に貢献する人材育成のために、尽力していきたい。

2期生は出願85人に対して本コースが2人、予備コースが43人。今年はお願が95人で、本コース2人、予備コース37人と増加している。

私たちとしては「医師になりたい」という強い意志をもった学生を送り込みたいので、経済的な問題で医師の道を断念せざるを得ない学生のために奨学金制度を設けている。